

4 水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

4-1-1 明治以前の主な洪水

記録からは、万治3年(1660年)、延享元年(1744年)、寛延3年(1750年)、安永9年(1780年)、寛政10年(1798年)などの洪水が大被害を及ぼしたと見られる。

表 4-1 岩木川水害史(明治以前)

年	被害状況
寛永元年	1624 大雨下通り大水
16年	1639 7月5日～8日まで雨降りやまず、下の切原子より下の通り金木辺まで破損、田畑残らず泥になり転退及ぶ。前代未聞の洪水。
慶安2年	1649 8月16日～17日夜まで大雨洪水、死亡者もあり、大川筋の家多く流れる。
万治3年	1660 7月14日より長雨。8.9月に至り、洪水甚し。閏8月20日洪水、土手町、紺屋町川沿いは大きな材木、家の内に流れ入り先頃架設の仮橋は残らず流出、独狐入り口の橋半分水浸し、町田、船水、三世寺は床上三尺に水上がり、舟で往来した。
寛文4年	1664 7月4日～5日、大風雨で岩木川洪水。広戸村で破船し6人死亡。
寛文10年	1670 5月21日及び6月1日出水あり、再度岩木川大洪水。
天和2年	1682 6月6日、岩木川洪水
貞享2年	1685 3月20日、駒越川(岩木川)洪水
元禄7年	1694 7月18日、岩木川洪水
宝永元年	1704 8月3日、岩木川洪水。土砂、木石流出
2年	1705 3月4日、岩木川洪水
3年	1706 12月21日、岩木川洪水。この年、大水害をうけた神原村を金木川口より移転。
4年	1707 7月8日、岩木川洪水。また8月19日大風雨、岩木川出水、大風で潰家192軒、田畑大被害。
正徳元年	1711 5月9日、岩木川洪水。紺屋町橋流失、紺屋町、御蔵町床上浸水、所々橋流失。
4年	1714 7月12日、岩木川大水。所々橋落ち、馬喰町、石渡大家流れ人死あり。種市村辺で出穂の上を舟で往来。
5年	1715 5月4～5日、5月17日～25日大雨で岩木川洪水。
享保12年	1727 3月23日、岩木川洪水。3月27日降雨続き流木17万本。
享保13年	1728 7月27～28日、大洪水。延宝8年以來の長雨で岩木川全流域で大被害。
元文2年	1737 7月13日～17日、岩木川、平川洪水。
寛保元年	1741 12月24日、岩木川出水、駒越、石渡、藤崎橋落ちる。
寛保3年	1743 3月7日、岩木川大洪水。二階堰留切破損、石渡御蔵浸水。ぬれ米千俵余、材木多く流出。 5月24～25日、大雨洪水。 6月24日～25日、大雨洪水。岩木川7分洪水。
延享元年	1744 3月6日、岩木川7分程出水。 5月28日大雨、29日岩木川小瑞、下の切、紺屋町、若党町、馬屋町、春日町床上浸水、流木15万8千本流出。その他川沿いの村々百余軒流出、田畑流出、人馬死亡。弘前南ため池破れ薬王院、和徳の橋落ちる、土手町、東長町橋大破。浅瀬石川大水、温湯家18軒、土蔵1棟流損。その他川沿い流出107軒、人馬、死亡多く損耗21,522石1斗余。延宝以來の大水という。
4年	1747 7月3日、岩木川洪水。
寛延3年	1750 3月7日～16日、岩木川、土淵川、洪水で二階堰大だまり破れかかる。 石渡街米蔵1千俵余ぬれる。40年以來の大洪水。
宝暦10年	1760 7月11日、岩木川大童子川洪水。流死2人、山崩れによる圧死4人赤田組田畑230町歩冠水。
明和6年	1769 6月12日、岩木川6分余の出水。
安永8年	1779 2月4日、岩木川、藤崎川洪水。 6月6日、領内大洪水、岩木川、平川筋で被害多し。 6月28日、岩木川、土淵川洪水、所々被害。
9年	1780 7月4日、平川、岩木川洪水、城下の諸橋流出、死者4人の他、往家、田畑など損失甚大。"白髭" 以來の洪水。
寛政9年	1797 3月5日、岩木川の上手所々崩れ、駒越町、紺屋町、龜ノ甲町、中町床上浸水、水死人数十人、川々の橋残らず流出。木造新田、金木新田水浸し、木造広須新田の土居35力所決壊。五所川原村10力所ぐらい決壊。
10年	1798 6月5日、岩木川60年来の大洪水、水の高さ1丈3尺。死者5人、堤防堰等欠損865力所、橋流失293力所。その他、家屋流出、田畑など甚大に被害。9月災害復旧に人夫4万5千人動員。
文化10年	1813 7月25日、岩木川洪水、流木あり。

年		被害状況
天保元年	1830	8月15日、大雨、岩木川洪水、樋口村土手、二階堰欠崩、下田通り一円土居総水浸し、流出家多く死亡39人。同17人、岩木川末流村々流出。平川も大水、所々破損多し。
11年	1840	5月12日より雨降り、13日岩木川洪水。駒越村舟場北側1軒流出、隣家半分くらい崩れ、新田地方土居水付になり、平川筋も出水所々被害。 7月13日、岩木川、平川など洪水。岩木川堤防破れ家3軒流出。
引化元年	1844	7月8日より10日まで長雨やまず、平川水源破ヶ関村湯ノ沢山中崩れ、溪ふさがり水たまり大沼となるも決壊して洪水一時に流れる。大鰐、蔵館、小金崎諸村人家流亡破壊多数。流死49人。俗にこの洪水を大鰐流れという。流出した家104軒、押し破られた家174軒、橋流失大小110カ所、ケガ人多数、街道欠崩78カ所、並木松流失161本、川欠け150カ所田畑石砂上がりあるいは川欠け藤崎まで225町など被害甚大。
嘉永5年	1852	3月16日、岩木川石渡川8分、翌17日9分5厘出水。大久保堰水門破損。

(出典：「青森県気象災害誌」青森地方気象台
「岩木川物語」図書刊行会、青森河川国道事務所資料)

4-1-2 明治・大正の主な洪水

明治・大正の洪水は、明治11年、14年、36年、大正2年の洪水がある。この他にも明治18年、37年、44年、大正12年などには融雪期に大洪水が発生している。

表 4-2 岩木川水害史(明治・大正)

年		被害状況
明治11年	1878	7月下旬、岩木川5分5厘の出水。8月7日十川氾濫、福島、水木、館ノ腰、堤防決壊一円水浸し。9月28日、浅瀬石川出水、付近村々浸水死者3人。
14年	1881	7月17日より雨降り続き、翌日夜岩木川9分の取水。浜ノ町堤防越水。外瀬村領並びに紺屋町で流死人あり。尾太銅山の材木大分流出。7月26日夜より28日朝まで大豪雨大川出水。石川村、橋流れる。岩木川で死者3人。
18年	1885	春季融雪期に大洪水。岩木川沿岸大巻堤防決壊、立木隣村姥巻まで流れ、五所川原村繁華街喰川町船、いかたで往来。藻川村築留堤防決壊し、十和田沼出現、繁田村字流木巻地内の堤防650間(約1,170m)決壊し、稲垣、館岡、車力3ヶ村3630町歩も海のようになる。
29年	1896	5月大水、車力村豊富地内の堤防180m決壊。その被害稲垣、館岡、車力の3カ所にわたり1180余町歩。 7月21日、午前2時頃より盆を覆すような大雨、岩木川、平川浅瀬石川の諸川増水、大鰐付近平川堤防破損し大鰐弘前間の列車運転休止。 9月4日より5日まで絶え間ない霖。土淵川は近年まれな出水で徒町、川端町などは水で包まれる。道路の水は4尺にも及ぶ。川沿いの一帯の家々は、襖の引き手まで浸水。その他各方面に渡り被害大。
36年	1903	7月24日、岩木川大洪水、稲垣村大字豊川字中袋地内新堰水門破損、堤防250間決壊、その被害稲垣、館岡、車力、3カ所にわたり、3864町歩。 9月6日、夜来大雨のため、諸川増水甚だしく、県下いたるところに災害多し。
37年	1904	4月1日、岩木川洪水。武田村大字長泥地内堤防65m破壊、その被害武田村182町歩。 5月5日夜より6日まで雨で50年来の大水、岩木川9分5厘の出水。土居一面の水にて鐘3点、人心恐々。ほか、金木川、十川、山田川等堤防破損、被害数万円。
44年	1911	4月6日、洪水にて飯詰村巻ノ沢溜池堤防決壊し、飯詰村に水押し寄せ家屋流出19軒、溺死4人。他、岩木川の洪水で西北西津軽郡の被害甚大。
大正2年	1913	6月28日、全県下に豪雨、流失埋没または、濁流のため収穫皆無になったもの多し。 8月27日、県下に暴風雨、雨量坪当6斗4合(2時間半)被害甚大。
12年	1923	3月、岩木川本支流とも融雪洪水、堤防決壊など損害多し。

(出典：「岩木川洪水記録」津軽工事事務所、「青森県気象災害誌」青森地方気象台
「岩木川物語」図書刊行会、青森河川国道事務所資料)

4-1-3 昭和・平成の主な洪水

岩木川での近年の大規模な洪水は、昭和50年8月、昭和52年8月に発生している。

岩木川の洪水は、ほとんどが前線性降雨によるものである。

表 4-3 岩木川流域の水害史(昭和以降)

年	被害状況
昭和10年	1935 8月21日午後より24日午前までの降雨量、碓ヶ関333.7mm、黒石303.0mm、五所川原290.6mm、弘前298.6mm、死者20名、行方不明4名、災害家屋13,200戸、水耕地1,651ha、氾濫想定区域は全流域の1/4の600平方キロメートルと考えられる。藤崎町地内、平川右岸、五所川原堰付近破堤、県道溢水、岩木川左岸青女子付近県道溢水、同左岸新和村桂地内県道溢水、平川右岸、石川、小金崎、浅瀬石川右岸浅瀬石村堤防決壊。
昭和33年	1958 7月下旬から9月まで連続の洪水で大被害が発生した。7月28～29日、岩木川水系では平川、浅瀬石川、十川の流域を中心に豪雨に見舞われ、大洪水、被害あり。月11～13日、集中豪雨。降雨量 四兵衛森378mm、西目屋水、被害あり。8月11～13日、集中豪雨。降雨量 四兵衛森378mm、西目屋308mm。中弘、西津軽地方を中心に大被害。9月5～7日大雨、雨量、四兵衛森158mm、朝日奈岳(馬淵川上流)94mm、津軽及び上北地方に被害。9月17～18日、台風21号の影響で県下に豪雨。岩木川流域の雨量、三笠山181mm、舟打鉦山175mm、弘前159mm、四兵衛森124mm、弘前市及び南津軽地方被害甚大。9月26～27日、台風22号の影響で各地に豪雨、被害あり。
昭和35年	1960 8月2～3日、津軽中南部と北部に局地的な豪雨。3日、雨量 碓ヶ関321mm、早瀬野324mm、砂子瀬186mm、金木182mm。被害は碓ヶ関村、大鰐町で被害甚大。被害状況は死者、行方不明者17名、家屋全半壊、流失312戸、床上床下浸水11,360戸、水田流失埋没、冠水1,398ha、その他土木施設等各面にわたり大被害。
昭和47年	1972 7月5～7日、津軽地方に集中豪雨、被害甚大、被害額63億円余。総雨量四兵衛森295mm、松代(鰻ヶ沢町)221mm、深浦197mm。8月3日、岩木山麓から十和田湖にかけて局地的に100mm以上の大雨、平賀町地内の国道決壊。8月18～20日、中津軽郡、弘前、三八地方に大雨、家屋浸水、田畑冠水などの被害。また、奥羽本線弘前駅でポイント故障のため列車の遅れあり。総雨量、四兵衛森225mm、八方ヶ岳315mm、目屋ダム192mm、弘前175mm。
昭和50年	1975 8月5～6日、津軽中南部地方に豪雨、岩木町百沢部落では岩木山麓助沢の鉄砲水で死者22名、住家流失など甚大な被害。他の地域でも建物、土木、通信施設、農地など各方面で大被害。本県災害史上かつてない大惨事となる。8月20日、台風5号の影響で津軽南部及び十和田湖付近に集中的な豪雨。平川、浅瀬石川、土淵川など各河川が氾濫し、弘前市、黒石市、中南津軽地方を中心に大被害発生。
昭和52年	1977 8月4日、夜半からの記録的な豪雨で岩木川、平川、浅瀬石川、土淵川などが氾濫し、大被害が発生。特に中弘南黒地方の被害甚大。弘前、黒石両市で死者行方不明者11名のほか、その被害は各方面にわたり大惨事となで死者行方不明者11名のほか、その被害は各方面にわたり大惨事となる。
平成2年	1990 9月19～21日、岩木川上流域及び平川上流に100mmを超す豪雨、特に岩木川南山麓(弥生)で177mmを記録。弘前市を中心に家屋及び農作物に大きな被害をもたらした。
平成9年	1997 5月7～8日、岩木川上流域及び平川上流域に100mmを超す豪雨。特に目屋で118mm、早瀬野で129mmを記録。折しも融雪期と重なり、上岩木橋地点で水位 43.71mと観測以来最高を記録し、三世寺で18.37m、幡竜橋で16.28mと警戒水位を超えた。
平成14年	2002 8月10日昼頃から東北北部に停滞した前線により津軽地方では大雨となり、五所川原上流域の平均累加雨量において105.7mmを記録した。この降雨により、岩木川の基準地点である五所川原水位観測所では8月11日22時に最高水位3.56mを記録した。
平成16年	2004 9月30日東北地方を通過した台風21号の影響により、30日未明から夕方まで強い雨が降り続き、平川上流の深山沢観測所で161mm、早瀬野観測所で157mmと、特に平川上流域に多い降雨をもたらした。この降雨により、岩木川の基準地点である五所川原水位観測所では10月1日0時に最高水位3.85mを記録した。

(出典：「岩木川洪水記録」津軽工事事務所、「青森県水害実記」東奥日報社、「青森県気象災害誌」青森地方気象台「岩木川物語」図書刊行会、青森河川国道事務所資料)

昭和10年8月洪水

オホーツク海高気圧と南洋上の高気圧の谷を不連続線を伴った幾つもの低気圧が通過し、東北地方の北部は8月21日正午過ぎから雷を伴った雨になり次第に勢いを増した。

特に岩木川流域は夜半から豪雨になり、翌22日に朝方には勢いがやや弱まったものの、午前5時過ぎに再び豪雨となり、23日の午前1時過ぎまで続いた。その後、雨は断続的だったが24日午前まで続き、岩木川流域では碓ヶ関 333.7mm、黒石 303.1mm、弘前 298.6mm、五所川原 290.6mm、板柳 291.3mm、木造 267.7mm、金木 155.8mm、と気象台測候所開設以来の記録となった。特に平川は碓ヶ関村久吉国道の橋梁を流失し、さらに同村において工事中の貯水池が決壊し、蔵館村、大鰐村では住家が床下浸水をする有様だった。



五所川原市三好地区
(出典：青森河川国道事務所資料)



五所川原市布屋町
(出典：青森河川国道事務所資料)

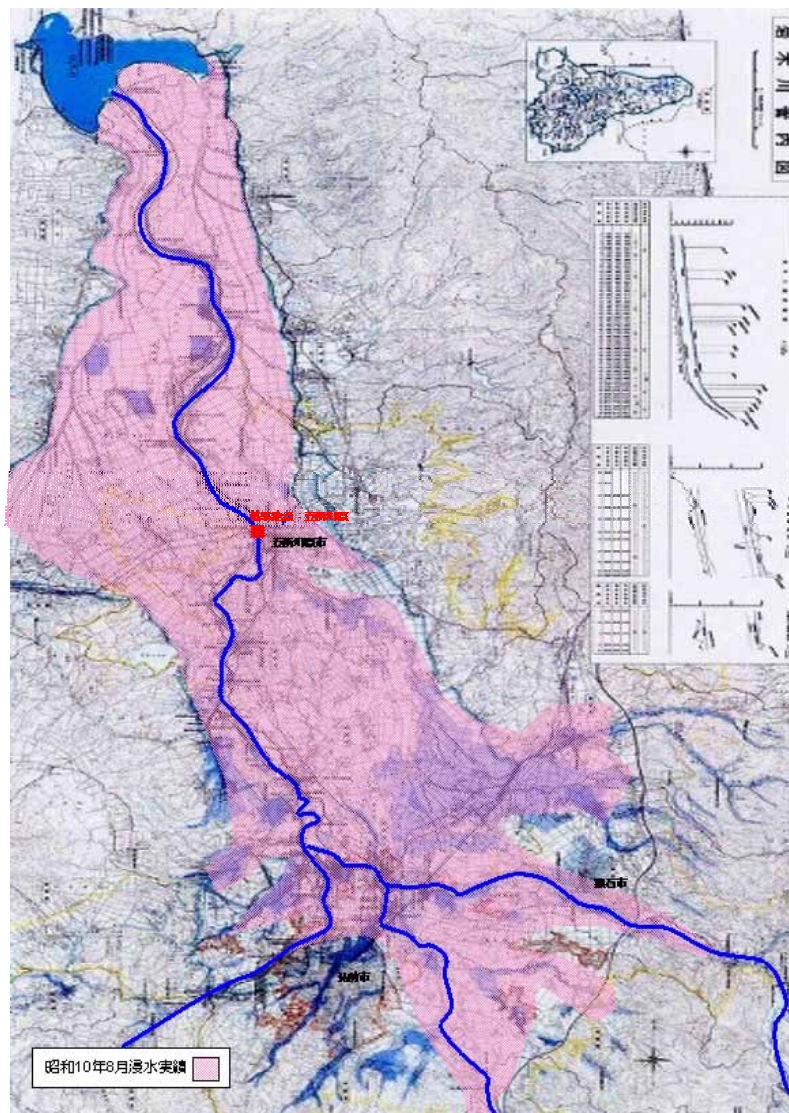


図 4-1 昭和10年8月洪水 浸水実績図

(出典：青森河川国道事務所資料)

昭和 33 年 7 月～9 月洪水

7 月から 9 月まで連続 5 回の水害が起き、その被害は昭和 10 年を上回る大惨事となった。

7 月災害。台風 11 号が過ぎた後に奥羽中南部の停滞前線が再び活動を始め、青森県まで張り出してきたため、7 月 19 日頃から断続的な降雨となった。さらに 26 日から 27 日にかけて中国東北部に発達した低気圧が東進して前線が活動し、28 日午後 9 時頃から 29 日夜明けにかけて激しい降雨になった。主として馬淵川水系及び岩木川水系の平川、浅瀬石川、十川の流域を中心に豪雨に見舞われ被害が出た。

8 月災害。太平洋南方の低気圧とシベリヤ、中国東北部方面の冷たい大陸高気圧による前線が日本海を北東から南西にかけて停滞していた。岩木川流域の四兵衛森方面では、12 日午前 1 時から 5 時までわずか 4 時間の間に 150mm という局地的な豪雨となり、岩木川、中村川、大童子川等の各河川は急激に増水した。至る所で決壊や氾濫が起これ、道路の決壊や橋の流失、耕地の冠水、住家の全壊など、中弘・西津軽郡を中心に大きな被害が出た。

9 月災害。9 月 5 日朝方から 7 日にかけて日本海中部にあった低気圧の東進により、また県下は豪雨に見舞われ、各地に大きな被害をもたらした。この低気圧は 6 日午前中に北海道西岸より太平洋に抜け、一時雨は止んだが、南西に延びていた前線は対馬海峡を通り熱帯性低気圧となったため速度が速まり、7 日に再び降雨となった。そこへ台風 21 号が接近し全県下は豪雨となった。三笠山の 182mm を最高に、舟打鉦山 175mm、上北鉦山 166mm、弘前 159mm、八戸 155mm、青森 152mm、田名部 107mm、四兵衛森 124mm、と西海岸地方を除いて記録的な降雨量を示した。



あふれる岩木川 長泥地区
(出典：青森河川国道事務所資料)



弘前市内を濁流となって流れる岩木川
(出典：青森河川国道事務所資料)

昭和 50 年 8 月洪水

8 月 17 日サハリン付近を通過した低気圧から、寒冷前線が、北海道北部から南西に延びていた。これが次第に南下して 18 日には津軽海峡付近で停滞した。

一方、台風 5 号崩れの熱帯性低気圧が、19 日には前線に乗り東進し、前線活動が活発となり、秋田県境付近で強い雨雲が停滞し、このため、20 日早朝から津軽南部及び十和田湖付近に集中的な豪雨をもたらした。

雨雲は一旦南下したが、再び県境付近に停滞し、県中央部では雷雨となった。

降り始めから 21 日 9 時までの雨量は、浅瀬石川上流毛無山で 263mm と最も多く、岩木川上流八方ヶ岳 245mm、碓ヶ関 194mm、大鱧 230mm、休屋 240mm と津軽南部から十和田湖周辺を中心とした地域に多く降った。

この局地的な豪雨で、平川、浅瀬石川及び本川上流は急激に水位が上昇し、警戒水位を超える大出水となり、平川筋百田で計画高水水位を数 cm 超える大出水となった。また、本川の中・下流も警戒水位を大きく上回る出水となり、平川・浅瀬石川及び弘前市内を流れる土淵川の各河川も氾濫して、6 日の水害に引き続き弘前市、黒石市、中・南津軽郡を中心に大きな被害をもたらした。



浅瀬石川温湯地区
(出典：青森河川国道事務所資料)



弘前市川端地区
(出典：青森河川国道事務所資料)

昭和52年8月洪水

8月4日未明、日本海西部と朝鮮半島にあった低気圧は北東に進み、5日3時には日本海中部、9時には津軽海峡西部に達し、21時には北海道東海上に去った。

この低気圧はそれほど強い発達はしなかったが、前線を伴っていたため北日本の上陸は南から湿った空気が入り込み、さらに沿海州に寒気団があり、大気の状態が不安定で前線の活動をさらに強めた。

4日夜半から津軽地方では、雷を伴った強い雨が降り出し、4～5時間続いた。その後、雨域は南下して一時小康状態となっていたが、低気圧後の二次前線の影響と見られる雨域があらわれ、黒石、弘前付近では、16時頃から再び強い雨となり20時頃まで続いた。各地の雨量は、五所川原120mm、弘前243mm、黒石263mm、四兵衛森328mm、大鰐134mm、八甲田238mm、浪岡225mm、1時間の最大降雨量は5日19時に弘前、黒石58mmと記録的な豪雨となった。

この豪雨により、岩木川、平川、浅瀬石川などの各河川は急激に増水し各地に被害をもたらした。直轄管理区間では破堤等の直接的な被害はなかったが、岩木川下流では、堤防すれすれまで水位が上昇し危険にさらされた。

弘前市では、土淵川支川、寺沢川上流に点在するため池が決壊したため急激に増水し、死者、行方不明者9名が出たほか、その他建物、耕地、土木施設などに大きな被害があり大惨事となった。浅瀬石川流域の被害も大きく、黒石市では死者、行方不明者が2名出たほか、各方面にわたり大きな被害があった。

平地河川の十川及び浪岡川の各所で越水破堤があり、浪岡町では町全体が水浸し、国道7号が通行止めとなるなど大混乱となった。この時の被害は、その他各市町村に及び、特に中弘南黒地方が大きく、流域内の被害総額は約235億3千万円にも達した。



後長根川 中崎地区の浸水状況
(出典：青森河川国道事務所資料)



弘前市山道町地区
(出典：青森河川国道事務所資料)

平成9年5月洪水

5月7日、発達した低気圧が日本海を北上した影響で、8日の県内は風雨が強まり、津軽地方を中心に土砂崩れや河川氾濫、洪水による被害が相次いだ。

岩木川でも上流の早瀬野雨量観測所で126mmを記録し、融雪時期と重なったこともあって、上岩木橋では8日6時頃から急激に水位が上昇し、8時頃には警戒水位を突破、11時には既往最高水位43.71mに達した。

洪水被害額は30億6千万円にも達した。被害は半壊1戸、一部破損2戸、床上浸水8戸、床下浸水20戸、その他農地の冠水、河岸の決壊等、全川にわたって続出した。



岩木川・平川合流点付近
(出典：青森河川国道事務所資料)



岩木川の氾濫による弘前市三世寺地区の浸水
(出典：青森河川国道事務所資料)

平成 14 年 8 月洪水

8 月 10 日昼頃から東北北部に停滞した前線により津軽地方では大雨となり、八方観測所（西目屋村）で総雨量 118mm、弥生観測所（弘前市）で総雨量 107mm、早瀬野観測所（大鰐町）で総雨量 112mm を記録し、五所川原上流域の平均累加雨量において 105.7mm を記録した。この降雨により、岩木川的全観測所において警戒水位を大きく上回り、基準地点である五所川原水位観測所では 8 月 11 日 22 時に最高水位 3.56m を記録した。



鳴瀬排水樋管堤内地

(出典：青森河川国道事務所資料)



釜段工 / 月の輪工

(出典：青森河川国道事務所資料)

平成 16 年 9 月洪水

9 月 30 日東北地方を通過した台風 21 号の影響により、30 日未明から夕方まで強い雨が降り続き、平川上流の深山沢観測所で 161mm、早瀬野観測所で 157mm、本川上流の相馬観測所で 134mm、浅瀬石川上流の沖浦観測所で 107mm、本川中流部の五所川原観測所で 103mm を記録し、特に平川上流域に多い降雨をもたらした。この降雨により、基準地点である五所川原水位観測所では 10 月 1 日 0 時に最高水位 3.85m を記録した。



弘前市大久保地区の内水排除

(出典：青森河川国道事務所資料)



32.8k 付近 リンゴ園の冠水

(出典：青森河川国道事務所資料)

4-2 治水事業の沿革

4-2-1 藩政時代

藩政時代から歴代藩主は領内繁栄のため水害防止に力を注いできた。

初代藩主為信は慶長 14 年(1609)「十川改修」、2代藩主信牧は慶長 16 年(1611)「大川堀換え駒越川一筋に直す」、元和 8 年(1622)「田光沼(支川山田川)添えに大堤築く」などを行った。

弘前市付近では現在の岩木川(駒越川)と弘前城西濠を流れる派川(樋ノ口川)がたびたび氾濫し、城下町に大きな被害を与えていた。そこで川を締め切り、駒越川一本にするため浚渫工事に着手した。しかし、樋ノ口川が大洪水に見舞われたため、その分流点に蛇籠や土俵を積み、それを足がかりに流れを締め切り、堀替えを含めた改修工事が行われた。

この工事により、弘前城を中心としたその周辺は洪水被害から守られ、徐々に宅地等の開発が活発となった。

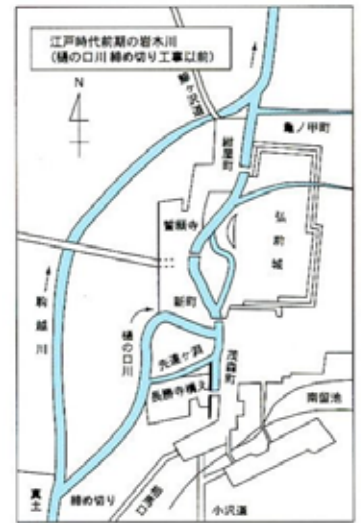


図 4-2 岩木川 江戸時代前期の岩木川
(出典：青森河川国道事務所資料)

4-2-2 明治時代

明治維新後、十三湖の水戸口閉塞は明治 10 年から 13 年の 4 ヶ年続いた。度重なる河口閉塞による氾濫被害を解消するため、明治政府は、オランダ人技師ローウェンホルスト・ムルデルを明治 15 年に十三湖へ派遣し、河口閉塞対策を調査させた。なお、対策は、大正 15 年に着工して昭和 21 年に導流堤が完成し、河口が維持されている。この河口処理は、当時の施工技術としては数少ない成功例とされている。

また、明治時代は活発な治水運動が展開された結果、岩木川改修に向けた調査が開始され、やがて明治 44 年全国主要河川改修計画の第 1 期河川に指定されたのを契機に、国直轄で本格的な岩木川の測量が実施されることになった。この陰には多くの先人たちの努力があったといえる。その中でも小野忠造は旧三好村(現五所川原市)の村長を務めた人物で水害に苦しんだ村民のために自分の財産で私設堤防(小野忠堤防)を築いた。



十三湖水戸口閉塞状況

(出典：青森河川国道事務所資料)



現在の水戸口

(出典：青森河川国道事務所資料)



図 4-3 水戸口閉塞による氾濫区域

(出典：青森河川国道事務所資料)

4-2-3 大正から終戦まで

岩木川は大正5年に下流部が河川法施行河川の認定を受けたことから、同6年には五所川原における計画高水流量を $1,580\text{m}^3/\text{sec}$ とした計画に基づき、同7年に内務省秋田土木出張所五所川原改修事務所が開設され、下流部を対象として築堤、河道掘削などの改修工事に取りかかった。

その後、昭和10年8月の大出水を受けて昭和11年に五所川原地点における計画高水流量を $2,400\text{m}^3/\text{sec}$ に改定し、改修対象区域を支川平川とその合流点まで延長した。

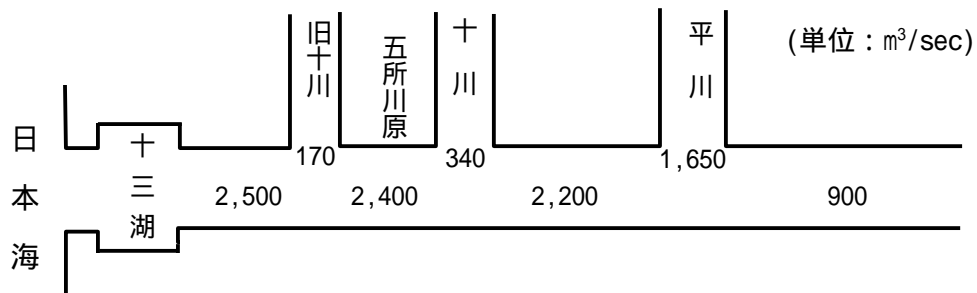


図 4-4 岩木川水系第1次流量改定(昭和11年)

4-2-4 戦後の治水事業

昭和21年には十三湖水戸口閉塞による洪水被害の解消を目的とした水戸口導流堤が完成した。その後、食料増産の国策によって十三湖周辺の土地造成と岩木川幹川の流末処理を目的とした圍繞堤工事に着工し、昭和36年に完成した。その間、治水・利水の総合的な検討の中で、目屋ダムが位置づけられ、昭和28年に目屋ダムによる洪水調節計画を含めて五所川原における計画高水流量を $2,000\text{m}^3/\text{sec}$ に改定した。しかし、昭和33年8月の上流部弘前地区の大出水を契機に、昭和35年に計画高水流量を一部改定した。

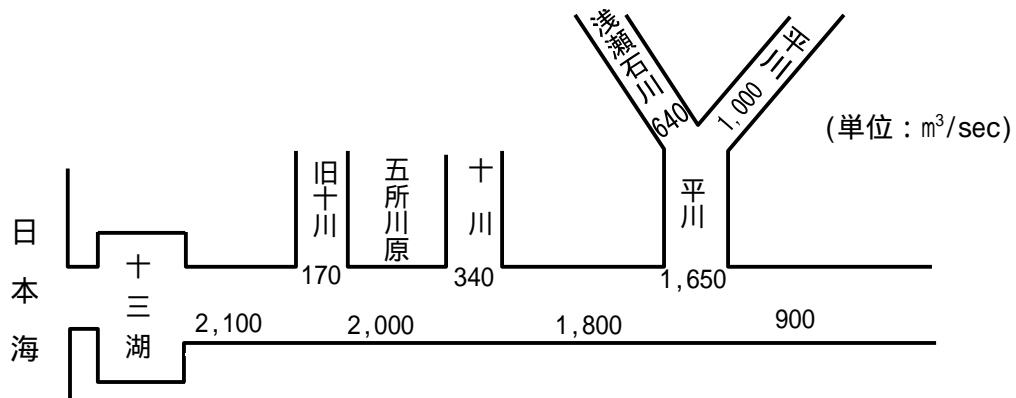


図 4-5 岩木川水系 第3次流量改定（昭和35年）

4-2-5 改訂計画

昭和40年には新河川法が施行され、翌41年には岩木川は一級河川の指定を受け、五所川原の計画高水流量 $2,000\text{m}^3/\text{sec}$ を踏襲した工事実施基本計画が策定された。その後も昭和44年8月等の出水が相次いだことや河川流域の開発状況等に鑑み、治水計画を全面的に改定することとした。昭和48年に基準点五所川原における基本高水のピーク流量を $5,500\text{m}^3/\text{sec}$ とし、これを上流ダム群により $1,700\text{m}^3/\text{sec}$ を調節し、計画高水流量を $3,800\text{m}^3/\text{sec}$ とした計画に改定した。

また、昭和63年には浅瀬石川ダムが完成、平成5年には目屋ダムの再開発として津軽ダムの基本計画が策定された。

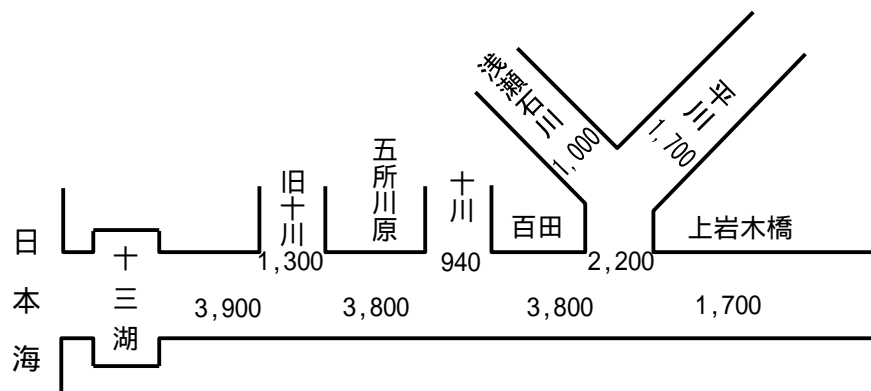


図 4-6 岩木川水系 工事実施基本計画流量配分図（昭和48年）

4-3 堤防の整備状況

岩木川は昭和41年に一級河川の指定を受け、工事実施基本計画を基に治水工事に取り組んできた。

昭和50年8月洪水により、平川、土淵川を対象に直轄河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、さらに昭和52年8月洪水を契機に「岩木川緊急施工計画」を策定し、昭和54年度から平成4年度の13年間かけて段階的な施工を行った。

洪水の安全な流下を図るべく、現在も築堤・河道掘削・水衝部の護岸・水制工などを実施している。

表 4-4 岩木川における主な治水事業の経過

箇所名	着手年	備考
三好築堤	大正10年5月	(五所川原)
鶴田築堤	大正10年6月	(鶴田右岸)
水元・新和築堤	大正10年8月	(鶴田左岸・上中畑)
柏築堤	大正12年5月	
葛蒲川築堤	大正12年6月	(鶴田右岸)
大巻築堤	大正12年7月	(鶴田右岸)
出精築堤	大正13年4月	(木造)
長泥築堤	大正13年4月	(武田)
稲垣築堤	大正13年6月	
川除築堤	大正13年7月	(木造)
五所川原築堤	大正14年8月	
田茂木築堤	大正14年8月	(武田)
大性築堤	大正15年4月	(鶴田右岸)
水戸口導流堤	大正15年5月	
豊川築堤	大正15年8月	(稲垣)
繁田築堤	昭和3年4月	(下繁田)
車力築堤	昭和3年5月	
武田築堤	昭和3年8月	
旧十川築堤	昭和11年8月	
平川右岸築堤	昭和12年1月	
十三湖右岸圍繞堤	昭和21年11月	
十三湖左岸圍繞堤	昭和30年	
平川左岸築堤	昭和40年代	
弘前右岸上流築堤	昭和47年	
浅瀬石川右岸築堤	昭和51年	
浅瀬石川左岸築堤	昭和51年	
弘前左岸下流築堤	昭和55年	
弘前右岸下流築堤	昭和56年	
板柳築堤	昭和62年	
三世寺築堤	平成6年	

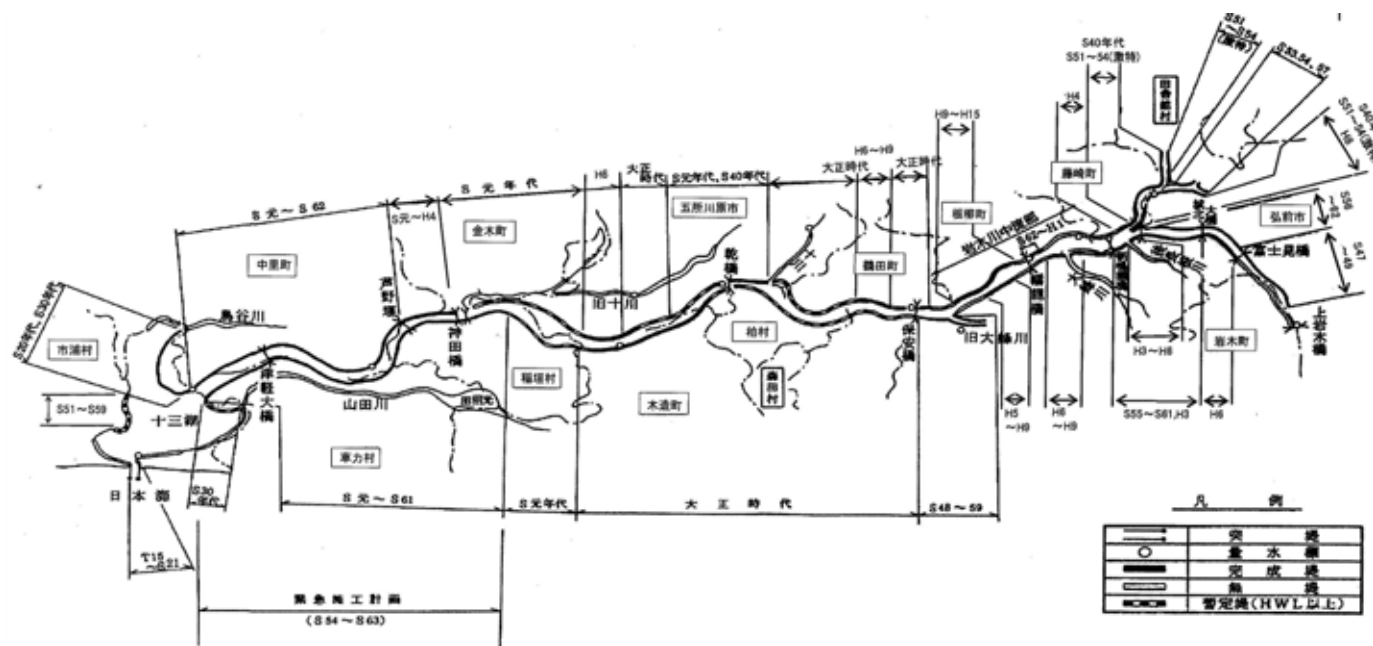


図 4-7 岩木川改修整備状況